



Ⅲ

この土器は器厚・内面整形などから考えて、瀬戸内地方の土器とは違いをみせる。さらに腹部に斜格子の押圧をほどこす幅広突帯を有するのは成川式土器の特徴ともいえる。突帯がすれ違い、格子に布目を残すのも成川式土器にはよくみられる。胎土・色調・焼成度も似ている。この土器は、先の編年試案にあてはめると笹貫式土器に該当する。

南九州の土器の瀬戸内地方における出土は、すでに鎌木・高橋の両氏によって指摘されており、両氏はこれを古墳時代初期における西方文化の東への波及と解釈されている（註2）。しかし、先にも記したように笹貫式土器は須恵器と伴うものもあり5世紀以降のものと思われる。したがって、この資料は層位的に不明であるが、あえて述べれば王泊3層あたりに伴うものではなかろうか。この点についてはまた稿を変えて記したい。

筆者は先に棒状両端穿孔土鍾の広がりについて記し（註3）、鹿児島県にみられる隔絶した状況に注目したが、王泊遺跡においてもこの土鍾が京都大学の発掘によって出土している。北九州・中九州にみられない土鍾が、鹿児島県ではすでに4ヶ所に出土しているという事実は、成川式土器が岡山県まで運ばれているという事実と考えあわせ、5・6世紀における鹿児島と畿内との関係を物語っているといえよう。

なお、鶴久森氏はここを船泊りとしての交通路の要衝に営まれた集落と解されていたらしいが、この付近は瀬戸内海の潮が東西に分かれる地点であり、奈良時代に海の祭祀が行われたとされる大飛鳥遺跡も約40km南にある。とすれば、鹿児島から畿内へ出かける船が、この高島へ立ち寄り、潮待ちしたと考えることも可能であろう。

今後、こうした資料の蓄積によって色々の様相が鮮明となつてこよう。

（註1）坪井清足『岡山県笠岡市高島遺蹟調査報告』岡山県高島遺蹟調査委員会 1956年

（註2）鎌木義昌・高橋護「古墳文化各説——四国・中国」『新版考古学講座』第5巻 雄山閣

1970年

（註3）池畑耕一「隼人の漁撈生活」『隼人文化』第5号 1979年